

令和2年度 田辺市自発的活動支援事業

共催 社会福祉法人 やおき福祉会
NPO 法人 和歌山県自閉症協会
和歌山県発達障害者支援センターポラリス

発達障害に関する最近の取組み (健康管理やバリアフリーの推進)について

講師

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設「のぞみの園」

総務企画局 研究部長

日本自閉症協会 理事

日本発達障害ネットワーク 副理事/事務局長



日 詰 正 文 先 生

令和2年12月11日(金)から17日(木)の間、YouTubeでの限定公開にて講演会を開催いたしました。講師には、日詰正文先生をお招きし、「発達障害に関する最近の取組み(健康管理やバリアフリーの推進)について」というテーマでご講演いただきました。

概要は以下の通りです。

発達障害には、自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群という仲間の分類に加え、注意欠陥多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)、トゥレット症候群、吃音などが含まれています。自閉症には、知的な遅れを伴うものもあります。最近では、自閉症が、自閉スペクトラム症や自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害が、注意欠如多動症というように、名前が少しずつ変わってきています。約10年前、世界中の様々な国で、まだまだ理解のない発達障害を理解してもらうための取組みをしようという動きがあり、世界自閉症啓発デー(4/2)が、国連で採択されました。世界中で、発達障害への理解を深めるための取組みを広げようということがなされています。

レオ・カナーは、より良い支援をするために、「小児自閉症」という診断名を用い、統合失調症(当時は精神分裂病)とは異なる支援をしていくべきだと発信しました。ローナ・ウイングは、「自閉症スペクトラム」という言葉を用い、自閉症と呼ばれる方が幅広く存在していることを発信しました。知的に高い自閉症の方たちは、自身が自閉症だと認識できるようになったことで、特徴を書いた自伝を出すなど、自閉症の人が困っていることに対する理解が深まる

きっかけになりました。

発達障害のなかにある ADHD や LD も、以前は「MBD(微細脳機能障害)」と言われていました。その後、ICD-10 という WHO による統計分類なども作られ、現在準備中の ICD-11 では、今まで別の群に分かれていた知的障害、自閉症、ADHD、LD などが、神経発達症群としてまとめて考えられるようになる予定です。

性格や育て方の問題ではなく、脳のコンディションによるということを、皆で知っていきこうという時代になってきています。

次に、社会の中で、少しずつ増えているサポーターやバリアフリーについてです。

現在、新型コロナウイルス感染症でマスク着用が求められています。発達障害の方、特に自閉症の方の中には、感覚の過敏さにより、マスクを着用できずに困っている方がいます。これに関し、厚生労働省や WHO が理解を求め旨を出しています。観光施設や交通機関では、事前にマスクが着用できないことを相談すれば、対応してくれるところが多いようです。事前に相談することが、当事者側・支援者側ができるエチケットではないかと思えます。

厚生労働省や国土交通省などの発信により、関係者、行政機関などにも、感覚過敏について知られるようになってきています。

感覚過敏に関する困りごとは、災害時にも見られています。東日本の震災は、家族が別々に動いている屋間に起こったため、言葉を喋れない自閉症のお子さんが一人で避難所に滞在するということが起こりました。結果偏食がひどくて何も食べられないことや、音に耐えられず、出ていったり、大騒ぎをしたりする、といったことが何件もありました。一番大事なことは、どういうことに過敏さを持っているかを知っている人を近くで見つけるということです。そのためにも、日頃のつながりを大事にしてほしいと思います。熊本の震災では、列に並べない家族への物資の配達、耳栓やイヤマフの手配、発達障害者支援センターへの周知といった支援を行いました。

近年、様々な場で、発達障害の方への配慮が始まっています。空港には、クールダウン・カームダウンスペースといった音や光を和らげるボックスが設置されているところがあります。当事者だけでなく、対応する側の従業員も練習しようということで、飛行機の搭乗体験ができるイベントも行われました。これは、国土交通省のバリアフリーの話し合いでも評価されており、他の交通機関でも注目されています。イギリスでは、クワイエット・アワーという取り組みも行われました。お店の中での、うるさい、まぶしい、冷たい体験が和らぐ時間を作ってみようというもので、日本でも一部のスーパーで試行的に取り組まれています。

会話の苦手さへの配慮にも取り組まれています。国土交通省では、コミュニケーションハンドブックという冊子を作成し、発達障害の方への対応を練習しようという時代になってきました。床屋、美容室では、髪を切られることが苦手な自閉症のお子さんに安心してもらうために、見通しが立つような声かけをするという取り組みもなされています。

福祉以外の場でも、できる配慮を見つけ、仲間に取り組みを広げているところが増えており、厚生労働省や国土交通省が後押しする時代がやってきました。

発達障害者の高齢期についてです。発達障害者支援センターにおける相談状況は 19 歳以上の方の相談が年々増えてきており、就職や子育てなどで苦労されている方がたくさんいらっしゃいます。

ホームレスの方への支援をされている支援者方に、成人期以降の発達障害の方への支援の内容についてアンケートを行いました。その結果、60%の方が答えた中に、看病という答えがありました。さらに、知的障害の方と比べ、発達障害の方は、健康面のサポートを必要とする方の割合が高いようでした。感覚の過敏さにより、病院に行くことを避けてきた方が多く、具合が悪くなってから病院に行く場合では、暴れる、うまく話せないなどの問題が起こっ

ているようです。健診だけでなく、小さいころからかかりつけの病院をつくり、知っておいてもらうことが大切だと感じました。

知的障害や自閉症の方の中には、30代くらいから目や耳の機能、40代では運動機能や循環器の機能が低下する方が多いという調査結果があります。また、てんかんは40代以降に初発発作を起こす人も珍しくはなく、てんかんの発作を起こして骨折することもあります。このように、自分でうまく伝えられなかったり、説明できなかったりする方々への健康管理を意識しないといけない、ということを伝えていきたいと思います。

一般の方が認知症に気づききっかけとなる症状の中には、知的障害・発達障害の方がもともと獲得できていないものもあり、認知症への気づきが遅れることがあります。20代30代は落ち着いていたにもかかわらず、高齢期になって不安定さが出てきた場合、認知症による不安や、目や耳の機能の低下が関係していることがあり、からだや認知症の問題に目を向けることが大事な視点になります。医療機関に定期的に通い、元気で活発な頃の記録を定期的にとっておくことで、健康面の問題に気づくことができます。

身近な、活用しきれていない“仲間の力”についてです。強度行動障害支援者養成研修でも行っていることですが、強度行動障害の方の課題となっている行動が見えた時には、支援者の方々は、次のことをチェックすると良いでしょう。本人の特性や困っていること、周りの人が必要なことをしていない、もしくは余計なことをしていることで、本人がそういう行動を起こしやすい環境を引き起こしている可能性、などについてです。そのうえで、本人の強みに合わせた具体的な支援を考え、必要なサポートを整理していきましょう。福祉だけでなく、医療機関や教育機関でもこのようなトレーニングが行われ始めています。

また、様々な場で、支援者側のイライラをコントロールするための練習を行っています。2人ずつで組を作り、1人が虐待をする人、1人が止める人の役をします。虐待する人を止める、止まれた人を褒める、そして、止めた人に感謝するというロールプレイです。普段なかなかすることのない経験なので、実際に練習することで、実践につなげることができます。

ひきこもりの方や自閉症の方への支援であっても、自分が説得するんだと気負いすぎず、誰に言ってもらったら次へすすめるのか、という考えを持ちましょう。

日詰先生には大変お忙しい中、
ご講演いただき感謝申し上げます。

末筆になりましたが、日詰先生のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。